

何分詳細筆紙に難^{じつくしがたく}尽、

最早疾^{せき}に閣下方御明察

被^{あらせられ}為在候と存候得共、難^{もくし}

黙止不得止事、生^{しがたくやむをえざる}が

杞憂の余まり衷情吐露

仕^{つかまつり}申候。此旨要用如斯^{このむね かくのいごとく}に

御座候。敬具。

八月二十一日午後八字小樽にて

清隆

従道
純義 両閣下

二伸 乍^{まつぎようながら}末行恐入候へども

三条公へ伊井両印より

如何様なる事出来^{しゅつたい}すとも

御動揺なく断然御決心

有^{これあるよう}之様邦家の為め

御尽力あらせらるる事

両閣下切迫に申込

被^{くだされたき}下度義偏^{ひとえ}に奉^{ふしたてまつり}伏仕度候。

岩倉公、有栖川宮の所も

必ずく、何とか伊井両印より

申込、大印、三菱社等

の術中陥られさる様

是又邦家の為め

奉切願候也。

○ 寺島氏へも両閣下より

能々く御打合相成、万つ

機会を失せざる様、偏に

御尽力被下度義

奉祈禱候。以上。

此本文は御覽済火中